

世界の動きがわかる!



Toronto 国際エイズ会議

HIV/エイズ 25年目の課題

1981年にアメリカ疾病対策センターが初めて5人の症例報告をしてから25年、これまでに6500万人がHIVに感染し2500万人の命が奪われた。この地球規模の危機への対策を検討する第16回国際エイズ会議（IAC）が8月13〜18日にカナダのトロントで開催され、4500の発表やNGOなどのブース展示に2万6000人が参加した。

梅井 正義 = 文
(エイズ&ソサエティ研究会 副代表)
text by Terui Masayoshi

【テーマは「約束を果たすとき」】

8月13日の開会式で、インドネシアのフリッカ・チャ・イスカンダル氏がHIV陽性者を代表し、「あなた方は2001年と06年、ニューヨークの国連本部で2つの誓約に署名しました。この約束を果たし行動してください。署名を文章の飾りで終わらせないでください」と各国の指導者に呼びかけた。「約束を果たすとき」(Time to Deliver)これが今回の会議のテーマだ。約束には歴史がある。01年の国連エイズ特別総会で、初の世界全体のエイズ対策指針となるコミットメント宣言が採択された。前年に初めて途上国で開催されたIAC(南

アフリカ・ダーバン)で強く叫ばれた治療の要求は、この宣言には十分反映されなかったが、途上国支援の基金をつくるのが合意され、02年に「世界エイズ・結核・マラリア対策基金(GFATM)」が設立された。03年には国連エイズ合同計画(UNAIDS)と世界保健機関(WHO)が、05年末までに途上国の300万人に対する治療の提供を呼びかけた(3 by 5)。04年のIAC(タイ・バンコク)の標語は「すべての人にアクセスを(Access for All)」とされ、05年のG8サミットと国連世界サミットでは治療に加えて予防、ケア、支援もアクセスの対象とされた。06年の国連エイズ対策レビュー

総会で採択された政治宣言では、この「普遍的アクセス(Universal Access)」が目標として明記された。つまり約束を一言で表せば、2010年までに予防・治療・ケア・支援への普遍的アクセスを必要とするすべての人に保障しようということ。この目標の達成には、国家と社会の指導者が率先してエイズ対策を優先的政策とする、対策に必要な資金を確保する、治療と予防の科学技術を開発する、感染拡大の社会的要因である女性・同性愛者・性労働者・薬物使用者・外国人労働者など弱い立場に置かれた人々への蔑視と差別をなくす、こうした広範な課題に真摯に対応しなくてはならない。これ

らは同じく開会式でUNAIDSのピーター・ピオット事務局長が強調したことであり、この会議が掲げた重要課題でもあった。

【資金不足が課題】

エイズ対策では予防と治療を包括的に進めることが必須とされる。予防に関しては今回、新しい技術であるマイクロピサイドの開発に特に注目が集まった。女性の膣に用いる殺ウイルス剤で、30の候補薬から14種が人への安全性と用量を調べる試験に進み、そのうち5種について効果を確認する試験が約3万人の女性の協力を得て行われている。その最初の研究成果は2年後



3日目の本会議でのパネルディスカッションの様相。会議には約170カ国から研究者や医療関係者、NGO関係者などが参加した。©Lisa Brantley/IAS

薬だけでなく、服薬を指導する医療従事者も足りない。サブハラ・アフリカだけで80万人の看護師が不足しているという。エイズは15〜50歳の死因のトップであり、働き盛りの命が失われていく中で人材養成が急務とされる。治療はようやく途上国にも導入され始めた。治療を受けられる人の数は03年の5倍の150万人に増えたが、ま

だ必要とする人の4分の1にすぎない。ダーバン会議では治療薬(ARV)は服薬が難しく途上国には不向きとの声も聞かれたが、服薬継続は先進国より良好であり、検査と予防の拡大に寄与しているという。何よりも増上に立つアフリカの陽性者の元気の姿が、治療普及の効果を示していた。対策の進捗状況から見ると「資金不足の解消(Fund the Gap)」

が切実なスローガンになるのは当然だ。途上国のエイズ対策費は80億ドルで、01年から4倍に増加しているが、約束を果たすにはまだ足りない。会場では国際NGOによってGFATMへの拠出増を呼びかける冊子が配られたが、この時点で日本はGNP比でG8中最下位。政府と市民社会の責任を痛感せざるを得ない。

日本は二国間援助も含めて額の上では貢献しており、青年海外協力隊のエイズ対策など優れた活動もある。会議の展示場は先進各国の国際協力の宣伝の場でもあり、日本もブースを設けて取り組みを紹介したが、地球規模の最大課題の一つであるエイズに対する政策を明確に定め、さらに強力にアピールすることが重要と思われる。



2006年8月13日、会場近くで、「すべての人が予防、治療、ケア、支援へのアクセスを利用できるように」と国際社会に訴えるデモ隊。開会式では、インドネシアのフリッカ・チャ・イスカンダル氏が陽性者を代表して壇上に立ち、「この約束を果たしてほしい」と各国の指導者に要求した ©AFP=時事

Column

JICAも取り組みをアピール

JICAは外務省、厚生労働省、国際協力銀行(JBIC)と共同で展示会場内にブースを設け、行政レベルからコミュニティレベルまで包括的・持続的に行ってきたHIV/エイズ対策協力や今後の方針を、DVDやスライドなどを使って発信した。中でも、英文資料「サブハラ・アフリカにおけるHIV/エイズ対策協力方針」への関心が高く、詳細を尋ねる参加者が多かったほか、重点地域・分野や予算総額など日本の支援の

特徴にも注目が集まった。

また、青年海外協力隊と現在実施中のエイズ対策プロジェクトの専門家がそれぞれの取り組みを説明。隊員が作詞し、マラウイで大ヒットとなった予防啓発ソングも呼び水となり、ブース来場者は、北米、アフリカ、CLMV(カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム)を中心に、5日間で約600人に上った。

